



2013年(平成25年) 5月13日 月曜日

日

鉄のふしぎ?
博物館

■9

磁鉄(じしゃく)頓智才兵衛

江戸時代の大衆向け雑誌(黄表紙)に磁石をテーマにした面白おかしい読み物が登場しました。『じしゃく頓智才兵衛』という絵物語です。著者は虚空山人(北尾政美画、1791年刊)。以下にその一部を紹介します。

江戸っ子の才兵衛さん「何か金もうけのタネはないか」と浅草にでかけます。すると「てつ屋」

衣川製鎖工業・衣川良介社長



そてつ屋

と看板のかかった店に、いろいろな金物を吸いつけた大きな磁石が飾ってあるのが目につきました。「そうだ、この石でもって金物屋をはじめたら、大金持ちになること疑いなしだ」と思いついた才兵衛さん、その石を『うそ八百貫』で買って帰りました。

まず才兵衛さんは、刀屋に向かいます。すると、さあ大変、刀屋から刀や脇差しがすっ飛んで来



磁鉄頓智才兵衛の表紙

て、磁石のまわりには栗のいがのようにくっついてしまったのです。刀屋で困った才兵衛さん、鉄ものはやめた」とあきらめ、今度は磁石を持って鎌倉に出掛けました。昔、新田義貞という大將が大軍をひきいて稲村ヶ崎に来たとき、ちょうど満潮で軍勢が渡れなくて困った。その時、黄金づくりの刀を海中に投げ入れて、潮が引くように願をかけた」という昔話を思い出したからです。稲村ヶ崎につくと、才兵衛さん、早速海辺へ磁石を突き出しました。とこ

才兵衛さんはある日、前衛門(まへもん)さんという人からこんな相談をかけられました。「雷や雨というものは雲の上に住んでいる鬼が落したり降りさせたりするそうだが、その鬼を一匹生け捕りにして見せ物に出したらもうかると思うのだが、どうだろうか」というのです。その鬼をどうやって生け捕りにするのかというところ、磁石を空高く持ち上げて、鬼の持っている鉄の金棒を吸い寄せればいいというのです。才兵衛さんはその知恵を借り、早速実行に移りました。才兵衛さんの空高くかけた磁石は、鬼の持っている金棒を引っ張りはじめました。雲の上の鬼達は「こりゃ何事だ。地震か。いや、地震だ」と騒いで、金棒が地上に落

ちないように頑張ります。そこで鬼と才兵衛さんの引っ張りっこになりました。ところが、才兵衛さんの一人の力では鬼の力にかないつてありません。才兵衛さんは磁石を持ったまま、鬼の持つ鉄棒に吸い寄せられ空高く舞い上がってしまいました。

結局、鬼を生け捕りにして見せ物にしようと思った才兵衛さんは、逆に鬼に生け捕りにされて見せ物にされてしまいました。もっとも、鬼達はとても親切でした。そして才兵衛さんはカミナリの国の美人と結婚して地上に戻ることができたというわけです。

参考図書

磁石の魅力 板垣聖宣著
仮説社 1980年